朱鞠内湖の環境物語りにおける２つの人間－自然関係

永田素彦（京都大学）・錦木孝介（京都大学）
Motohiko.nagata@at8.ecs.kyoto-u.ac.jp

１．はじめに

人々が自然環境にどのような価値を感じているかは、人々の自然への関わり方を大いに規定する。自然にまったく価値がなければ、自然環境の利用も、自然環境への配慮も意味がない。自然環境の価値は、利用価値と非利用価値に大別できる（鬼頭, 1996）。利用価値は、さらに、消費可能な生産物として得られる直接的利用価値と、消費的な利用ではないものの利用することによって得られる間接的利用価値とにわかれる。非利用価値とは、明確な利用形態とは離れて存在する価値であり、さらに内在的価値と本質的価値にわかれる。内在的価値とは、畏敬や驚嘆の対象としての自然の価値であり、いわば審美的な価値である。本質的価値とは、人間の介在とは無関係に、自然そのものに備わっている価値である。

本稿では、朱鞠内湖の流域環境に関するインタビュー調査を行い、環境の価値に関する言説を収集・整理した結果を報告する。

２．インタビュー概要

インタビュー調査は、2006 年 9 月上旬に、幌加内町の 3 地区（幌加内、朱鞠内、母子里）で実施した。インタビュー協力者は、朱鞠内湖周辺の流域環境と関わりが深い職業に従事している 17 名であり、内訳は、農業 4 名、農業団体 2 名、酪農 2 名、漁業協同組合 1 名、観光協会 1 名、町役場 2 名、大学技官・事務 4 名、小学校教員 1 名であった。

インタビューは、半構造化面接法で行われた。具体的には、2005 年に実施した関心事調査の結果をふまえて、川や湖の汚染、生態系の変化を中心に、朱鞠内湖の流域環境と仕事や生活の関わりを比較的自由に語ってもらった。また、地球環境問題に関する質問もした。インタビューの所要時間は平均 1 時間程度であった。インタビューは許可を得て録音し、トランスクリプトを作成した。

３．自然環境の価値に関する言説

上述の環境価値の分類にそって、自然環境の価値を表現しているとみなすことができる言説をトランスクリプトから抽出した。

利用価値については、仕事や生活と結びついた形での言説が多く見られた。例えば観光協会の K さんは、「自然をうりにしているので、木はあって当たり前だが、もし木が無かったり減ったりしたら・・・動物たちのすみかが森林の減少とあわせて減る。動物、植物、今注もあまり育たなくなってくるので、観光地として維持できなくなる。ただの土地になっちゃう」（①）と、観光地としての利用価値について述べている。ただの土地では価値がない、人間が利用することで価値が生まれるという考え方は、酪農業の N さんの発話にも見られる。「次の世代に、そういう（植林をする）お金の使い方、国のお金の使い方ってのはやっぱり

必要かなと。でなかったら、荒地が出てさ、汚染はないかもしれないけども、なんちゅうの、有効的な土地の使い方ではなくなるかなって感じはするね」(②)。あるいはより日常生活に関連した例としては、「この辺の川も、そんな状態（汚染）になって飲み水影響あるようだったらやだなー、とか。子供もいるので飲んだ水によっていざ次の子供を産むとなったとき変なことになっちゃったらやだなー、てところも」（K さん、町役場；③）などが見られた。

非利用価値については、利用価値とはいえないが、自然がもつ何らかの価値を表している発話を抽出した。いくつか例を挙げる。「やっぱり山が好き。年とるごとに、自然のありがたみや凄さはだんだんわかりますね」（H さん、町役場；④）；「ただ、ここには石狩川の原種がいるんですよ。将来本当、川がよくなれば、この種を徐々に下に流していくのは、メリットとして一つのストック場所としてあるのかなという感じはしますけどね」（N さん、農業団体；⑤）；「たまに実家に帰ってみて、魚いるかなーって眺めてみて、いるわけないよなーっていう寂しさはないことはないですね」（K さん、町役場；⑥）；「子どもの頃に泳いだり本当にちょっとした浅瀬ではタオルでね、ドジョウをすくったりウグイすくったりしてたんですよ。２、３人でこうやって遊んだ記憶があるけど、今では・・・やっぱり寂しいですね」（T さん、教員；⑦）など。いずれの発話も、さしあたって、人間の利用を離れて自然の価値を認めている点で、利用価値とは明確に異なっている。

４．２つの人間―自然関係：相互作用と相互浸透

こうした自然環境の価値についての言説は、人間－自然関係には 2 つのあり方があることを示唆している。その 2 つを、相互作用的関係、相互浸透的関係と呼ぼう。相互作用的関係とは、人間と自然をそれぞれ独立自存するものと捉え、その上で両者が相互に影響を及ぼしあうような関係である。利用価値（①～③）は、主体としての人間が、対象としての自然を利用することによって得られる価値であり、したがって相互作用的関係を前提として成立する価値である。

非利用価値はどうか。非利用価値の中でも④（内在的価値）、⑤（本質的価値）は、人間とは独立して存在する自然に固有の価値が存在するとしている点で、相互作用的関係に立脚している。これに対して⑥、⑦の背景にある関係は、相互作用的関係と比べて、人間と自然の境界がより曖昧で一体となっている印象を受ける。このような、人間と自然が、互いに互いを規定しある一つの全体として相互に浸透しあうような関係を、相互浸透的関係と呼ぶ。つまり、非利用価値には、相互作用的関係にもとづく価値のほかに、相互浸透的関係に由来する価値以前の感情のようなもの、いわば「価値以前的な価値」があるのではないか。

さて、廣松（1983）の物象化論をふまえれば、2 つの人間―自然関係のうち、相互浸透的関係の方が基底的であるといえる。つまり、人間―自然関係は、本来的には相互浸透的なのだが、物象化の帰結として、「人間」や「自然」が独立自存するものとみなされるようになり、相互作用関係にあるものとみなされている。そうであれば、相互作用的関係を前提とする価値に対して、相互浸透的関係に由来する「価値以前的な価値」はより基底的であるといえる。この価値以前的な価値は、明示的な価値と比べて議論の俎上にのせることが難しいが、自然と人間の関わりを考え、環境の将来を描く際に、十分考慮する必要があるだろう。